

入選

友達のために

千葉県 増穂中学校 3年 川嶋 航平

僕が小学4年生のときです。幼稚園のときからいっしょで仲のよい友達がありました。彼とは家が近くて毎朝いっしょに学校に行ったり、よく遊ぶような仲でした。しかし、小学4年生の3学期の頃でした。もともと彼は頭痛持ちで、学校をたびたび休みことがあったのですが、一週間連続で休むようになり、一ヶ月休むようになり、ついには学校に来られなくなってしまいました。さすがに友達も先生も心配するようになりましたが、僕たちにできることは特になかったのです。そして、彼が「起立性調節障害」という病気だとわかったのは、その一週間後のことでした。

その病気は、朝頭痛で起きられなくなり、学校に行けなくなる場合が多くなるものでした。基本的に症状が出るのは朝だけで、昼には学校に行けるようになるのですが、長期間休むとなかなか行きづらくなるようでした。確かに久しぶりに学校に行くとなると、思っている以上に勇気がいります。彼のためになにかできることはないかと考えて、まずは毎日のように遊びにいったり、学校のことをひたすら話すようにしました。

(学校のことがわからないと不安なんじゃないかな?)と思ったからです。最初は、話してもあまり聞いてくれなくて苦労しましたが、5年生になった頃には笑いながら話し合えるようになりました。

それから約2年後、卒業式の日です。僕は彼といっしょにクラスのみさんと教室にいました。前日までは行きたがっていなかった彼に、卒業証のもらい方や礼のしかた、移動のしかたなど、教えられることはすべて教えて、なんとか当日に間に合い、連れてくることができました。結局ふつうに学校に通うことはできませんでしたが、最後の最後で、クラスのみさん全員で卒業式に出られたことが一番うれしかったです。

式が終わったあと、みんなクラスの一人一人に向けて書いてあった手紙を交換し合いました。僕もクラスのみさんから手紙をもらったけれど、一番文章が多かったのは彼からの手紙でした。その文章の中には、「いろんなことやってきたけれど、一番うれしかったのは学校に誘ってくれたり、いろんなことを話してくれたことだった」と書いてあったのです。いつもはこんなこと言わない彼なので、とても驚いたけれど、とてもうれしかったことを今でも覚えています。

親切とは、どこまでの行為のことをいうのかはわかりませんが、どんな人でもできることだと僕は思います。友達に勉強を教えたり、近所の人ですれ違った人にあいさつをすることだって親切な行為かもしれません。そんな小さな一つひとつの親切を大切にして、これから生活していきたいと 생각합니다。